

編集委員が選んだ本

『知っていますか？日本の戦争』

久保田貢／新日本出版社／2015年4月
／1600円（税別）

一つのテーマが、中・高校生が読んで理解できる表現・内容・分量となっており、すぐに授業で使えるようになっている。生徒に読ませていいし、教員がアジア太平洋戦争を再確認するにもいい。こういう本を持っていた。

テーマの付け方も「戦争を誰が始め、誰が止めなかったのですか？」「日本は中国で何をしたのですか？」といったシンプルな問いとなっている。住んでいる地域で起こった空襲についての記念碑があるにも関わらず、大学生は「知らなかった」と言っていたとの記述がある。教科書だけを教えていればいいのではないと反省した。

『学生のためのピース・ノート 2』

堀芳枝・編／コモンズ／2015年4月／2100円（税別）

タイトルだけだと現代社会の授業や「総合的な学習の時間」の国際理解に役立つ本のように思えるが、一番勧めたいのは地理の授業で世界地誌を扱う際の、特に東南アジアの教材研究においてである。

インドネシアとバングラデシュの紹介は、ある一般人に焦点を当てて記述がなされているので、具体的にどんな生き方をしているのかがわかり、高校生が十分に理解できそうだ。

里山の論文の中には、貧困や戦争といった「近代的不幸」と対比した、アイデンティティの不安やリアリティの欠如などの「現代的不幸」という表現がある。これも高校生にはイメージしやすいだろう。

参考文献の紹介で、基本／発展という具合にページ数の薄い本と専門書とをわけて提示しているのも良いアイデアだ。

『資本主義の克服「共有論」で社会を変える』

金子勝／集英社新書／2015年3月／720円（税別）

『戦後史の正体』『日米開戦の真実』などで今注目の孫崎享氏の講演を聞いていたら、自身と並んで金子勝氏のツイッターを薦めていた。

現状に警鐘乱打し続ける著者の、言わば「金子経済学」による具体的改革提言の集大成が本書であるように思う。昨年出された『儲かる農業論』（集英社新書）との併読がいいと思うが、アベノミクスの恐ろしい末路と、それに対する代替案に説得力がある。

著者の提案する「地域分散ネットワーク型システム」で再生可能エネルギー兼業農家や個々の利用者のニーズに合ったケアサービスが広がっていくことを期待する。

『日本人は人を殺しに行くのか』

伊勢崎賢治／朝日新書／2014年10月／780円（税別）

この資料が印刷され手もとに届くころ、国会はいわゆる「安全保障関連法案」になんらかの結論を出していることだろう。しかし、それがどういうものにせよ「集団的自衛権」をめぐる問題は、日本国民にとって喫緊の重大事であることに変わりはない（TPPも原発もだが）。

本書のサブタイトルは「戦場からの集団的自衛権入門」だ。著者は、国連PKO上級幹部として東ティモールやシエラレオネの、日本政府特別代表としてアフガニスタンの武装解除を指揮した経験をもつ。その著者が、「集団的自衛権の行使を容認しないとアメリカは日本を助けてくれない、というのはウソだ。」と明言する。思えばベトナム戦争もイラク戦争も、ウソで始まった……。

『多数決を疑う—社会的選択理論とは何か』

坂井豊貴／岩波新書／2015年4月／720円（税別）

多数決は本当に私たちの意見を正しく反映しているのか。選挙と政治だけでなく、日常生活・学校の教室でも疑問を感じることは多い。著者は、ベターな集団の意思決定として「ボルダールール」を挙げている。選択肢が3つであれば、1位に3点、2位に2点、3位に1点という配点をして、得点の総合計で選択肢を順位づけるものである。この方法は小選挙区制の選挙でも有効であるという。ただし、争点が複数でなく1つの場合は、中位の人の意見を採用する中位ルールが望ましいという。日本国憲法の改正は「各議院の総議員の三分の二以上の賛成で、国会が、これを発議」（日本国憲法第96条）とある。なぜ「総議員」と「三分の二以上」という条件がついているかの理由もわかる。もっとも根本問題として、現在の日本の国会議員選出が、1票の格差・不平等の放置の中、しかもボルダールール不採用の中でおこなわれていることが残っているが。

『維新の肖像』

安部龍太郎／潮出版社／2015年4月／1700円（税別）

2013年に『等伯』で直木賞を受賞した著者が、月刊誌に連載したものを加筆・修正した。二本松藩士として戊辰戦争を戦った朝河正澄と、アジア・太平洋戦争へ突入していく日本に警鐘を鳴らした朝河貫一父子の史実を重ね合わせ、明治維新を達成した手法を継承する近代日本の国策の過ちを示唆している。今回の本誌特集記事とともにあわせて読みたい著書。